

VI 不適切な演出手法の根源へ ―― 故意と、その先にある

裏切り

委員会は今回、本件放送の制作者をはじめとする日本テレビ関係者が、不適切な演出手法が採られるに至った理由や経緯をどう認識しているかについて、本件放送の録画DVDと報告書で語られている説明とを繰り返し照らし合わせながら検証を進めた。

率直に言って、制作者の言うような「(I 占い師が登場する、と) もし誤解して番組を見た方がいたとしても、見てもらえば、必ず満足してもらえると確信していた」「(心底1人でも多くの視聴者に楽しんでもらおうという) 思いが強すぎて行き過ぎてしまった」という説明には首を傾げざるを得なかった。

こうした説明と本件放送の内容とのあいだには、大きな落差がある。しかもその懸隔ゆえに、テレビと視聴者との関係、制作者と出演者との関係、制作者同士の関係や制作者の自己意識など、本件放送が問いかけている数々の問題が見えなくなっているのではないかと私たちは疑問を抱いた。

以下、ひとつひとつを見ていきたい。

(1) 過失か、故意か

制作者は、また周囲の関係者は、本件放送をもう一度、最初から終わりまできちんと見てほしい。

何度見ても、I 占い師が登場する、と視聴者に「誤解」させるようにしか作られていない。ラテ欄も、ナレーションも、サイドスーパーも、Qショットもすべて、話題のあのI 占い師がスタジオ出演する、という一点に向かって構成されている。自称占い師と実際の占い師を呼び分けるという約束事もどこへやら、一分の隙もなく、きっちり、くどいくらいに視聴者がそう思うように仕向けている。ここには一から十まで、制作者の故意が働いている。

その結果として視聴者が、この番組のどこかできつとI 占い師が登場するだろう、と考えたことは、誤解とは言わない。これこそまさに、制作者が狙ったとおりの正解だった。

それをなぜ、「もし誤解して番組を見た人がいたとしても」などと、迂闊にもその可能性を見落としていた、と言わんばかりの口調で語るのだろうか。あるいは、そこで採られた演出手法が単なる「行き過ぎ」の、あたかも過失でもあったかのように説明されるのか。

委員会の席上の発言をそのまま引用すれば――故意にやったことを取り繕おうとして、バカを装っているんじゃないか？

ガラが悪い、と顔をしかめないでいただきたい。ここは大事なところだ。

放送倫理は、ヤラセや捏造のように、ある意図を持ち、故意に行ったことについては真正面から問うことができる。だが、過失や不注意や事故による不祥事の場合、倫理的な問題にはなりにくい。実際は、まったくそんなことはないのだが、一部にはそのように考えられている節もないわけではない。

本件放送の制作者はそのことをわかっていて、だから、自分たちは視聴者を故意に騙そうとしたのではないし、まさか多くの視聴者がそんなふうには誤解するとは思ってもよらなかった、と過失や迂闊であったことを装い、ことの重大性を軽く考えようとしているのではないか——私たちは本件放送を何度も見て、そう考えないわけにはいかなかった。

もしほんとうに制作者が「視聴者が誤解するとは思わなかった」と考えていたとすれば、その人間を見る目、視聴者とのコミュニケーション能力、プロの表現者として持つべき他者への想像力にかなり問題があると言わなければならない。

これは放送倫理というより、職業適性の問題となるが、もちろん私たちはそのような不適格な制作者がいるとは思いたくない。だからこそ、故意の問題にこだわるのである。制作者は最初から視聴者を騙そうとした、そして、そのためにさまざまな演出手法を駆使したのだろう、と。

私たちは制作者に、なぜそのような演出手法を採ったのか、虚心に振り返っていただきたい、と思う。

(2) 視聴者への裏切り

「行き過ぎ」という言葉遣いにも、違和感があった。

行き過ぎとは、目的地を越えて通り過ぎること、度を超して対象に関与することだが、この言葉には、しかし、方向性は間違っていなかった、と弁解するニュアンスがある。体罰教師が「愛情はあった。ただ教育熱心のあまり、行き過ぎてしまった」と取り繕うときに口にする、あの言いまわしである。この弁解が見苦しいのは、口で言うほど肝心の子供の姿が見えていないことがミエミエだからである。相手の姿が目に入っていないとき、行き過ぎは目的地も対象もメチャクチャな、単なる暴走になる。

テレビが目的地とし、対象とするのは、もちろん視聴者である。制作者は視聴者に向けて番組を作り、視聴者にしっかり届けることを仕事にしている。

本件放送の制作者が、行き過ぎだった、と言うとき、視聴者の姿をきちんととらえていたか、視聴者に対する愛情や敬意はあったのだろうか。体罰教師が口にする程度の愛情であれば、それは、少し露骨に言うと、視聴者に対してタカをくくり、ダシに使って数字（視聴率）を稼ごうとした、ということではないか。そういうものは愛とは言わないし、視聴者にていねいに向き合っていたとも言わない。

そこにあるのは、視聴者に対する裏切りである。

(3) 出演者への裏切り

本件放送はさまざまなものを裏切っている。視聴者への裏切りはもちろんそのひとつだが、裏切りはそれだけではない。

本件放送では、放送台本なり進行表を手にした司会陣を別にすれば、出演したタレント、芸能人、芸能ジャーナリストらも騒動の渦中のI占い師がスタジオに登場する、と思っていたにちがいない。それとは別人のS占い師が現われたときの、一瞬、「アレッ？」と戸惑った様子が画面には映っている。

一人ひとはプロだけに、その後のS占い師をまじえたトークはそつなく盛り上げていくが、本件放送が「今夜ついにスタジオへ。オセロ中島騒動の占い師が謎の同居生活全貌を激白」と言いつづけ、I占い師が登場すると煽ってきた流れについて、巧みに笑い飛ばすなりして視聴者を唸らせ、娯楽として納得させるようなことまではしていない。

というより、それは事実上、無理だった。本件放送の制作経緯で見たように、この段階ではどのようなナレーションやQショットやサイドスーパーがつけられるか決まっていなかった。あらかじめどんな構成の番組になるのか、どんな編集がされるのかの大筋くらいわかっていなければ、出演者としても対応のしようがない。

同じことは、出演したS占い師についても当てはまる。かつてI占い師が自宅に居候していたときの体験を一生懸命語っているのに、まるで当て馬のように扱われている。話が具体的で、面白いとしても、番組全体を見れば、そのような役柄にはめ込まれている。

本件放送は多くの出演者にも、裏切られた、という感情を抱かせる、後味の悪い仕事だったのではないだろうか。

(4) 他局同業者への裏切り

どのテレビ局も、5月のゴールデンウィークさなかのゴールデンタイムにどんな番組を放送するか、知恵を絞っている。制作者も一生懸命考え、幾晩も徹夜までして番組を作り、どれだけたくさんの視聴者に見てもらえるだろうか、と神経をすり減らしている。

2時間枠の本件放送の平均視聴率は、12.8%だった(関東地区)。他局の番組は時間枠の取り方が異なったり、ずれていたりするので一概に比較はできないが、これがトップか2位の高視聴率だったことは間違いない。騒動渦中のI占い師がスタジオ出演する、と大々的に煽った本件放送は、数字を見るかぎり、当たりだった。

しかし、出る出る、とセンセーショナルに盛り上げ、膨大な視聴者を惹きつけ、強引に引っぱりながら、結局、I占い師は出なかった。出ないことがわかっていて、放

送した。これは、フェアな競争と言えるだろうか。「それって、アリか？」という声が聞こえてきてもおかしくない。これは、同業の他局と他局の制作者に対する裏切りでもあった。